

## 鹿児島県における果樹園の経営規模別生産性に関する研究

中原之教\*・児玉隼人\*

NAKAHARA, Y. and KODAMA, H. Productive Studies of Distinct Management-scale on the Orchard in Kagoshima Prefecture.

## I. はしがき

鹿児島における果樹の産地は北は出水地方より南は大隅、さつま半島の南端にいたり、更に離島では屋久島、種子島、大島の広い地域に亘り形成されていて園地分散の度合が甚だ大きい状態である。なお昭和34年度現在における柑橘園の経営規模別面積の調査を実施したのであるが、調査対照面積 2,018 ha 中、柑橘園の経営規模 20 a 未満 (63%), 21~30 a (18%) で結局 30 a 未満が (81%) をしめて極めて零細な経営が行われている。更に果樹の副業的な経営 (63%) が多く果樹農家としては不安定な形である。この調査によると柑橘面積 60~100 a の規模 (即ち経営面積が大きい程) が最も生産性が高く安定した経営がすすめられている。逆に面積が狭小になる程生産性は劣る。よつて本県の果樹農業の伸展を計るためには、果樹を中心にした果樹農家の経営基盤の確立が本県の果樹農業を推進するうえでの基本的な課題といえる。

## II. 調査地の概況と調査方法

(1) 調査地 鹿児島県日置郡市来町大里地区で海岸線に面し、年平均気温は 17°C 線に位置して温暖な地帯である。現在の柑橘園面積は約 75 ha で古い柑橘産地である。

(2) 調査方法 調査対照農家は経営的には水準のよい部類である。果樹園の経営規模別に 5 戸あて (10 a 未満, 11~30 a, 31~60 a, 61~100 a, 普通作農家別) きき取調査した。

## III. 調査成績

## 1. 経営規模別農業粗生産額の構成

第1表 経営規模別農業粗生産額の構成 (1戸当)

経営規模		水稲	麦	甘藷	そさい	陸稲	菜種	畜産	柑橘	合計	比
10 a 未満	生産額(円) 比 (%)	75,000 46	19,800 12	23,500 13.8	6,400 4	400 0.2	3,400 2	4,400 3	31,600 19	164,500 100	81%
11 ~ 30	生産額(円) 比 (%)	105,600 38	20,900 7	25,700 9	8,800 3	1,500 0.5	4,900 2	10,000 3.5	102,300 37	279,700 100	138
31 ~ 60	生産額(円) 比 (%)	76,800 18	17,200 4	27,600 7	7,800 2.4	2,400 0.6	6,400 1	22,000 5	258,000 66	418,200 100	207
61 ~ 100	生産額(円) 比 (%)	60,000 10	—	11,000 2	—	—	—	—	510,000 88	581,000 100	287
普通作農家	生産額(円) 比 (%)	116,400 58	26,000 13	18,200 9	30,800 15	1,000 0.4	2,400 1	7,500 3.6	—	202,300 100	100

\* 鹿児島県果樹試験場

(1) 農業粗生産額の総額 標準農家として普通作農家の調査を実施した。その粗収益額は (202,300 円) であった。この普通作農家に比べて、柑橘園面積 61~100 a (287%) で約 3 倍に近い粗収益である。11~30 a (138%), 10 a 未満は (81%) であつて、経営面積の同じ程度のこの普通作農家の水準より (21%) 程度下廻つた粗収益である。結局、果樹園面積 31 a 以上の果樹農家の粗収益は、普通作農家 (作付面積同一程度) に比べて (2.0 倍~2.9 倍) に当る水準である。

## (2) 農業粗収益の部門別の構成

(イ) 10 a 未満の粗生産額の主体は水稲 (46%), 甘藷, 麦, 果樹その他で水稲の率が大きく、普通作関係が (81%) で自給生産的色彩が濃い。

(ロ) 11~30 a は水稲 (38%), 果樹 (37%), 甘藷その他で普通作関係 (63%) で普通作の比が可成り高い。

(ハ) 31~60 a は果樹 (61%), 水稲 (18%), その他で果樹のしめる比が可成り高くなり、作物の種類も多少統一されて兼業的形態である。

(ニ) 61~100 a は果樹 (88%), 水稲 (10%), その他で作物数も統一されて、果樹の集中生産が行われて果樹専門的な形態である。

(ホ) 普通作農家水稲 (58%), そさい (15%), 畜産 (4%), その他で商品生産作物として畜産そさいが導入されているが、これも専門的な経営ではなくて、總体的には自給生産的色彩が濃厚である。

結局、果樹園面積 30 a までの経営は作物の種類が複雑で重点的な性質を有した作物は見られない。60 a 以上になると果樹の企業的な性格が明瞭になつている。

2. 経営規模別現金収益の構成

現金化率については、鹿児島県の農業構造にせめられている(普通作 65%, 果樹 97%)を基礎にした、普通作農家(131,500円)に比して、

(イ) 61~100aは(530,900円)で(404%)に当り約4倍の高い現金収入である。

(ロ) 31~60aは(354,400円)で(270%)で可成高い水準の現金収入である。

(ハ) 11~30aは(217,800円)で(130%)に当り普通農家に比して稍高い水準である。

(ニ) 10a未満は(117,100円)に当り普通作農家より少い現金収入である。

第2表 経営規模別現金収益の構成(昭和34年1戸当)

Table with 7 columns: 経営規模, 普通作, 果樹, 計, 比, 作付面積, 農外所得. Rows include 10a未満, 11~30, 31~60, 61~100, and 普通農作家.

結局、農業所得については果樹園面積が大きくなるにつれて現金収入(率)が大きくなっている。農業粗収益、部門別構成、現金収入など総合的に検討して現在の生産設備で収益力が高く、且つ経済の安定した規模は61a以上の果樹農家である。

今後果樹農家の経営の安定化をすすめ、更に産地体制を確立するためには、個々の経営基ばんである果樹園の経営規模を確立することが、柑橘産業の飛躍的な発展を計る基本的な問題であると考ええる。

3. 経営規模別の果実生産量の推移

(1) 生産量について 昭和32年~昭和34年の3ケ年について比較すると、規模61~100aの生産量(3,693kg)に比べ31~60a(87%), 11~30a(56%), 10a未満(46%)で規模が狭小になるに従い生産量が著しく劣る。この調査でみられる特徴は経営内において、樹のしめる比率が小さい農家においては果実の多収穫を期待することは困難である。果樹を中心にした経営的な構造の整った果樹農家の生産量の水準は著しく高い。

(2) 生産性の安定度について 昭和33年の豊作年を中心にして前後3ケ年の生産量の推移について、昭和34年度の生産量を100としてみると、

(イ) 10a未満 昭和33年(203%), 昭和32年(104%)で隔年結果の現象が著しく大きい。

(ロ) 11~30a 昭和33年(153%), 昭和32年(99%)で10aに次ぐ隔年結果現象である。

(ハ) 31~60a 昭和33年(140%), 昭和32年(82%)で11~30aと同じ程度の隔年結果をしめしている。

(ニ) 61~100a 昭和33年(113%), 昭和32年(98%)で隔年結果が著しく少く、生産の安定性が顕著である。

第3表 経営規模別の果実生産量の推移(10a当)

Table with 7 columns: 経営規模, 平均樹舎, 昭和32年, 昭和33年, 昭和34年, 平均, 比. Rows include 10a未満, 11~30, 31~60, and 61~100.

結局片手間式の狭小な柑橘園経営から脱皮して、果樹を中心にした適正な果樹園面積を確保してゆくことが、果樹の生産性の拡大を計り、経営の安定化を計る上で重要なことであることが理解できる。本県の果樹園の81%が30a未満の果樹園経営農家であるが、この調査では60a未満の果樹園の隔年結果の現象が大きく、30a未満においてはこの傾向が更に大きく連年の生産性は極めて不安定である点からみて、本県の果樹の生産性を向上せしめ、且つ連年の生産安定化を計るためには81%をしめる30a未満の果樹農家の経営的な水準を向上させることが、重要な課題であると考える。

4. 果樹の10a当純収益額の構成

柑橘園の10a当の純収益額についてみると、経営規模の広狭によりその差が顕著である。61~100aの農家の純収益が(93,984円)で最高である。次に31~60aが(65,400円)である。11~30aが(28,494円)であるが、この規模になると純収益は著しく劣る。10a未満になると(6,707円)という僅少な収益であつて経済作物としての有利性は認められない。

第4表 果樹の10a当純収益額の構成(昭和34年)

Table with 5 columns: 経営規模, 生産量, kg当販売価格, 生産額, 純収益額. Rows include 10a未満, 11~30, 31~60, and 61~100.

(註) 経費として流通過程における諸経費及び農機具等の消却等は除く。

#### IV. むすび

作物の経済的性格からみて、柑橘が優れた収益性を表している規模は60a以上の農家群である。30a未満になると作物の種類が多く自給生産的色彩が濃厚であるため、経済活動を活発にし得る重点的な商品生産の組織が欠けていて、総合生産性は低下している。折

角導入していて経済的に有利な柑橘の収益性まで著しく低下している実状である。

結局生産構造の問題であると思うが、作物の種類の一掃を計り、適地適産による集中的な生産構造の再編成を計り柑橘の有利性を発揮し得る経営的な体制をつくる必要があると考えられる。